

「山の上で主に出会う」

～東日本大震災6年に思うこと～

「しかし、わたしはあなたのみ力をうたい、朝には声をあげてみいつくしみを歌います。あなたはわたしの悩みの日にわが高きやぐらとなり、わたしの避け所となられたからです。」

詩篇59篇16節

東日本大震災から6年、そして、その翌早朝長野県北部を襲った地震のこともつい昨日のように思い出されます。東日本大震災で亡くなった方々は15,000人を越え、未だ行方不明の方々は2,500人を越えています。そして、原発事故のために未だに故郷を追われている方々、復興は進んでいるとはいえ、未だに仮設住宅に住んでいる方々も多くおられます。

6年も経過すると、徐々にその意識も薄れつつありますが、それは懸命に前に向かって進んでいる東日本の方々の頑張りによるものでもあると感じます。日本また世界で今後どのようなことが起こるかわからない時代。復興とは経済や生活が元通りになるということだけではなく、新しい方向に、道を切り開いていくことでもあります。次の世代に何を伝えていかということこそ最も大切な課題であると感じています。

イエス様は弟子たちにこれから自分がいなくなってからのことを意識して、3年半という短い時間を使って、一つ一つお教えになりました。この山の上のできごとはその時に見た弟子たちの中で、「沈黙」、「秘密」にされて、心の中に蓄えられました。イエス様は父なる神様との祈りの中で、特別な姿、イエス様本来の姿に変貌されました。この姿こそが、「聖」であり、イエス様が神ご自身であることの証拠でした。しかし、イエス様がご自身をこの世にお示しにならなかったのは、イエス様が人間としてすべての人々を救うために身代わりに苦難をお受けになるためでしたから、人としての生を全うなさいました。

しかし、ペテロとヨハネとヤコブだけには、本当の姿をお見せになりました。それはどうしてだったのでしょうか。その理由は聖書には書かれていませんが、それは父なる神様との祈りの生活に隠されているように感じました。そして、山に登るということ、すなわち、世俗から退いて、離れて、独り、神の前に出るという聖なる時間にこそ、その秘訣があるのだということを弟子たちに教えたかったのではないかと。弟子たちもやがて、祈りとみことばに生きることを通して力ある神の働きを継承していきました。すべての人生の答えはこの世の中にあるのではなく、創造主なる神の懐で悟ることができるのではないのでしょうか。

私たちは苦難と悩みを通して祈りの飢え渴きを与えられます。そう考えると、苦難を通して、私たちは、より神に近づき、すべての人生の希望を得ることができると信じられるのです。人生の中で少し立ち止まる瞬間こそ「宝」の時なのではないのでしょうか。今という時を大切に、しっかりと地に足をつけ、しかしながら目は限りない聖なる神を仰ぎ見、一步一步、共に手を取りながら、喜んで、感謝しながら、永遠に向かって進んで行きたいと願っています。